

# 新生児治療室で小児看護学実習をする学生の感じる困難感と 困難感の軽減に影響した事

キーワード：新生児、困難感、小児看護学実習

浦郷 美佳 (西入院棟5階)

## I. はじめに

看護実習において看護学生が患者の全体像をとらえることは看護をする上で重要である。患者をとらえるため、対象とコミュニケーションをとることは重要であるが、小児看護学実習は対象が小児であるが故にコミュニケーションを取ることの難しさや子どもとの接し方に躓き、学生自身も困難感を持つことが多いとされており<sup>1)</sup>、特に乳児、幼児前期の子どもを受け持った学生の不安はさらに強いと考えられる<sup>2)</sup>。少子化・核家族化がすすむ現代社会で小児と関わったことのない学生は多く、言語的コミュニケーションができない新生児を受け持つ学生の感じる困難感には特に大きいと考えられる。

乳児期から青年期の患者を受け持った学生の小児看護学実習における困難感やそれに対する指導方法の研究は先行文献で明らかにされているが、新生児を受け持った学生の困難感に特化した内容を示す報告は少ない現状にある。そのため、今回の研究で新生児治療室に入院中の新生児を受け持った学生の困難感と、困難感を軽減することに影響した事について明らかにした。

## II. 研究目的

本研究では新生児治療室で小児看護学実習を行う実習生の困難感と、困難感を軽減することに影響した事について明らかにすることを目的とする。

## III. 用語の定義

児：新生児治療室に入院している新生児

学生：H29年度新生児治療室で小児看護学実習を行った学生

困難感：実習のなかで学生が感じた困ったこと、不安に感じたこと、戸惑ったこと

## IV. 研究方法

1. 研究デザイン：質的内容分析
2. 方法：半構成的面接
3. 研究期間：平成29年10月～11月

4. 研究対象者：平成29年度新生児治療室で成育看護実習を行った学生3名

5. データ収集方法：小児看護学実習最終日に、新生児治療室で実習をする学生に対して本研究の説明を行い、同意の得られた対象者に対して、小児看護学実習最終日に20分程度インタビューガイドを用いて半構成的面接を実施した。

6. インタビュー内容を録音して逐語録を作成し、意味のある文節を抽出してコードとした。内容が類似するコードを集めてカテゴリ化し分析を行った。カテゴリーは【】コードは〈〉で示す。

## V. 倫理的配慮

研究参加者に研究目的・方法、秘密保持、データを本研究以外の目的では使用しないことを口頭、書面で説明し同意を得た。また、研究への協力は自由であり、研究が実習評価のためではなく今後の実習環境をよりよくするために実施するものであり、実習の評価には影響しないこと、やめたことによる不利益は無いことを説明した。研究から得た個人情報とは特定されないように配慮した。インタビューの中で知り得たデータは匿名化して病院内の鍵のかかる場所に保管し、データの分析後は全て速やかに破棄した。

## VI. 結果

### 1. 新生児を受け持ったことで感じた困難感

新生児を受け持ったことで感じた困難感についての結果を資料に示す。13のコードが抽出され、【児に触れることへの不安】【児を理解することの難しさ】【児の家族との関わりでの戸惑い】3つのカテゴリーが導き出された。

【児に触れることへの不安】は新生児に触れてケアを行う事に対しての不安や難しさであり、〈授業で人形では練習したけど、本当の赤ちゃんは動くから難しい〉〈抱っこするのが怖い〉〈片手で抱っこをしながら、片手でケアをしてってというのが難しかった〉〈落としちゃいけないから不安〉〈私が触って大丈夫なのかと

いう葛藤があった)の5つのコードより抽出した。

【児を理解することの難しさ】は、児の示す反応を解釈し理解することや、児の生活リズムについて理解することに対する困難感で、〈話せない分、自分が気づかなきゃいけないから難しいって思った〉〈自分が見たことから解釈しようとしたけど、それが本当にいいのか分からない〉〈赤ちゃんが泣いたらどうしていいのか分からない〉〈漠然と、赤ちゃんが泣くことに関して怖かった〉〈1日の赤ちゃんの生活とかケアの流れを分かるまでに時間がかかった〉の5つのコードから抽出した。

【児の家族との関わりでの戸惑い】は児の家族との関わりで感じた困難感であり、〈家族とあんまり会えないから、聞きたいことが聞けない〉〈どんなことを話したらいいか分からない〉の2つのコードより抽出した。

## 2. 困難感を軽減することに影響した事

困難感を軽減することにつながったことについて12のコードが抽出され、【実際に児に触れる経験】【新生児の生活を理解する事】【看護師の関わり】【看護師を役割モデルとすること】の4つのカテゴリーが導き出された。

【実際に児に触れる経験】は、実際に児に触れる経験や、学生が実施したケアにより児の肯定的な反応がみられたことにより困難感が改善したものであり〈実際に赤ちゃんにたくさん触れることで慣れてきた〉〈触ってみて分かることもたくさんあった〉〈毎日触れることでだんだん慣れてきた〉〈抱っこしたら泣き止んでくれて、だんだん落ち着いて対処できるようになった〉〈泣いている時にあやしたり色々して泣き止んだときに、泣いてた理由が分かった〉の5つのコードより抽出した。

【新生児の生活を理解する事】は新生児治療室での児の1日のスケジュールや生活リズムが理解出来ることで、児の理解や看護師との積極的な行動調整につながったというもので、〈1日の赤ちゃんの時間スケジュールが分かると実習計画をたてたり、看護師と行動調整をしやすかった〉〈自分がしたいケアを押しつけるんじゃなくて、赤ちゃんの生活リズムに合わせたケアをすることが大事だと気がついた〉の2つのコードより抽出した。

【看護師の関わり】は看護師の促しや問いかけで児への積極的なケアや、児の理解に繋がったという回答であり、〈環境整備とかは気づいたらどんどんやってって看護師に言われて、自分でもできることがあるんだと積極的になれ

た〉〈なんで泣いていると思う?とか何で泣き止んだんだと思う?って看護師に聞かれて、なんでかを考えるようになって、だんだん赤ちゃんが何で泣いているか分かるようになってきた〉〈最初はあんまり触っちゃだめだと思ってたけど、看護師から泣いてるから抱っこしてあげてって言われたり、哺乳してて言ってもらって、次からは積極的に介入できるきっかけになった〉の3つのコードより抽出された。

【看護師を役割モデルとする事】は看護師の言動を見て学ぶことにより困難感が軽減したというもので〈看護師がお母さんと話してるのをみて、そういうことを話したらいいんだと思った〉〈赤ちゃんが泣いてるとき看護師がどうしてるのかみて、こうしたらいいんだというのがだんだん分かってきた〉の2つのコードより抽出された。

## VII. 考察

### 1. 新生児を受け持ったことで感じた困難感

本研究では、小児看護学実習で新生児を受け持った学生の困難感として【児に触れることへの不安】【児を理解することの難しさ】【児の家族との関わりでの戸惑い】3つのカテゴリーが導き出された。実習で成人患者を受け持った学生の困難感についての先行研究では、学生の困難感の要因として「看護過程の展開」「患者の理解」「指導者との関わり」「患者家族への対応」などがあげられている。新生児を受け持った場合も、成人患者を受け持った場合も、「患者の理解」「家族との関わり」があげられており、これらは小児看護学実習で新生児を受け持った場合だけでなく、臨床実習全般で学生が感じる可能性のある困難感であると推察される。しかし、成人看護学実習や小児看護学実習で対象に触れること自体に困難感を感じるとされる先行文献はみられず、これは新生児を受け持った学生が感じる困難感として特徴的なものであると考える。これまで新生児と関わった経験の少ない学生にとって、新生児に触れることは不安や恐怖心を感じる要因となり、困難感へ繋がると考えられる。小児看護学実習の前に、学校で新生児の人形を用いたケアの演習が実施されているが、実際に受け持ちの児にケアを行う時には緊張してしまい、演習の時にはできていたこともできなくなってしまうことがあった。また、演習の時の人形とは違い、実際に児にケアを行う際には児の状況に合わせた臨機応変な対応や配慮が必要であるが、新生児と関わった経験の少ない学生にとってそれは難しく、困難感

につながっていると考えられる。

また、成人看護学実習でも学生が感じているとされる「患者の理解」も、新生児は言語的コミュニケーションがとれないため、表情や体の動き、身体症状の観察や児の個性や生活リズムを理解することが必要であることより、これまでの成人看護学実習とは異なる困難感を感じていた可能性があると考えられる。

また、研究を行った新生児治療室は、母子分離状態となり、家族が面会に来るというシステムであり、1回1時間程度と非常に短時間である。この短い面会時間の中で母親とコミュニケーションをとり、必要な情報を聞き出すことは難しく、その事が【家族との関わり】が学生の困難感としてあげられた一つの要因ではないかと考える。

## 2. 困難感を軽減することに影響した事

笠井らは、学生は子どもと関わる体験を通して不安を緩和していく<sup>4)</sup>と述べており、本研究でも【実際に児に触れる経験】を積み重ねることが困難感を軽減することに繋がったという事が示された。しかし、本研究で【児に触れること】が困難感につながる事が明らかになっており、学生が実習早期から自主的に児に触れることは難しいのではないかと考える。そのため、学生が新生児に触れることに対して不安や困難感を感じていることを理解したうえで、新生児のケアにおける注意点などを説明しながら安全にケアが実施できるような【看護師の関わり】が必要であると考えられる。

また【新生児の生活を理解する事】では新生児の生活リズムをイメージすることで、児に合わせたケアのタイミングをとらえることができ、積極的な看護師との行動調整につながる。そのため、学生が新生児特有の生活リズムを理解出来るような【看護師の関わり】が実習の困難感の軽減に繋がると考える。

また【看護師を役割モデルとすること】で、児に触れることや、児の家族との関わりでの戸惑いについての看護実践のイメージが具体化されて、困難感の軽減に繋がっていることが示された。そして、看護師が自分の看護や声かけの根拠を言語化して表現し、学生に伝えて看護の意味づけをしていく事が、学生の児への理解を深めることに繋がると考える。

## VIII. まとめ

1. 新生児を受け持った学生は【児に触れることへの不安】【児を理解することの難しさ】【児の家族との関わりでの戸惑い】に困難

感を感じている。

2. 看護師は、学生が新生児に触れることに對して不安や困難感を感じていることを理解したうえで、新生児のケアにおける注意点などを説明しながら安全にケアが実施できるような【看護師の関わり】が必要である。
3. 学生は【新生児の生活を理解する事】で、児に合わせたケアの実施や、積極的な看護師との行動調整につながり、実習の困難感を軽減するため、学生が新生児特有の生活リズムを理解出来るような【看護師の関わり】が必要である。
4. 学生は【看護師を役割モデルとすること】で、児に触れることや、児の家族との関わりでの戸惑いについての看護実践のイメージが具体化されて、困難感の軽減に繋がる。

## IX. 終わりに

本研究で、新生児治療室で実習をする学生が感じる困難感を軽減することに、看護師の関わりが影響していることが明らかになった。今後、研究結果を部署内で周知し、看護師の学生への関わりについて検討していくことが必要である。

### 〈参考文献〉

- 1) 山口明子：小児看護学実習における実習指導者の関わりと学生の学び 岐阜医療科学大学紀要 1号 P83-90, 2007
- 2) 丸山浩枝：小児看護学実習における乳児及び幼児前期の子どもを受け持つ学生指導のあり方-学生と子どもとのコミュニケーションに焦点をあてて- 神戸市看護大学短期大学部紀要第 24号 P45-53, 2005
- 3) 西田みゆき 他：小児看護学実習における学生の困難感 順天堂医療短期大学紀要 14 P44-52(2003)
- 4) 笠井由美子：小児看護学実習における戸惑いに対する学生の対処行動とその要因-乳児及び幼児期前期との関わりに焦点をあてて- 日本小児看護学会誌 Journal of Japanese Society of Child Health Nursing Vol. 20 No. 1 p148-154, 2011
- 5) 中本明世 他：臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較-基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して-千里金蘭大学紀要 12 123-134(2015)

1. 新生児を受け持つことの困難感

カテゴリー	コード
【児に触れることへの不安】	授業で人形では練習したけど、本当の赤ちゃんは動くから難しい。
	抱っこするのが怖い
	片手で抱っこをしながら、片手でケアをしてっていうのが難しかった。
	落としちゃいけないから不安
	私が触って大丈夫なのかという葛藤があった。
【児を理解することの難しさ】	話せない分、自分が気づかなきゃいけないから難しいって思った。
	自分が見たことから解釈しようとしたけど、それが本当にいいのか分からない。
	赤ちゃんが泣いたらどうしていいのか分からない。
	漠然と、赤ちゃんが泣くことに関して怖かった。
	1日の赤ちゃんの生活とかケアの流れを分かるまでに時間がかかった
【児の家族との関わりでの戸惑い】	家族とあんまり会えないから、聞きたいことが聞けない。
	どんなことを話したらいいか分からない

2. 困難感を軽減することに影響した事

カテゴリー	コード
【実際に児に触れる経験】	実際に赤ちゃんにたくさん触れることで慣れてきた。
	触ってみて分かることもたくさんあった。
	毎日触れることでだんだん慣れてきた。
	抱っこしたら泣き止んでくれて、だんだん落ち着いて対処できるようになった。
	泣いている時にあやしたり色々して泣き止んだときに、泣いた理由が分かった
【新生児の生活を理解する事】	1日の赤ちゃんの時間スケジュールが分かると実習計画をたてたり、看護師と行動調整をしやすかった。
	自分がしたいケアを押しつけるんじゃなくて、赤ちゃんの生活リズムに合わせたケアをすることが大事だと気がついた。
【看護師の関わり】	環境整備とかは気づいたらどんどんやってって看護師に言われて、自分でもできることがあるんだと積極的になれた。
	なんで泣いていると思う？とか何で泣き止んだんだと思う？って看護師に聞かれて、なんでかを考えるようになって、だんだん赤ちゃんが何で泣いているか分かるようになってきた。
	最初はあんまり触っちゃだめだと思ってたけど、看護師から泣いてるから抱っこしてあげてって言われたり、哺乳してみたって言ってもらって、次からは積極的に介入できるきっかけになった。
	看護師がお母さんと話してるのをみて、そういうことを話したらいいんだと思った
【看護師を役割モデルとする事】	赤ちゃんが泣いてるとき看護師がどうしてるかみて、こうしたらいいんだというのがだんだん分かってきた。